



情報科学センター長に就任して

久代 紀之¹

ほかほかと春を感じる3月末のある日、6年間務められた鶴正人前センター長（お疲れ様でした）より、良く整理いただいたパイプファイル（センター長関連資料）というバトンを受け、情報科学センター長という重責を勤めさせていただくことになりました（よろしく願います）。

このパイプファイルをレクチャーいただきながら、「ふむふむ」と頷きつつも、内心は「これは大変なことを引き受けてしまったかな？」と感じたことを覚えています。そして、情報科学センターの業務をわずか6ヶ月間見てきただけですが、ちょっと予想を超えていました。現在、情報科学センターには、教育・研究のための情報基盤（計算機、ネットワーク）の設計・維持・管理、左記基盤上の種々の業務アプリケーション支援などのテクニカルな業務に加え、情報セキュリティに関わる運営体制・ガイドラインの作成およびそれらの普及・コンプライアンスなどのポリティカルな2面の業務があります。これら両輪（テクニカル・ポリティカル）の業務を、種々の学内組織（情報基盤室、図書館、学術情報委員会などの関連する各種委員会・作業部会・仕様策定WG）、学外組織（大学間連携、省庁）とも密接に連携して進める必要があります。さらに分散した3キャンパスで同時にかつタイムリーに展開して行く必要があります。私が、把握できているだけでもこれだけの業務があり、いかにスタッフの専門性が高いとはいえ、これらを限られたリソースでこなしていくという大変な職場であることを実感しました。スタッフ各位のご尽力には頭が下がります。

本センターが立脚する計算機・ネットワーク技術分野は、いうまでもなく進歩が激しい分野であり、国際化・コンプライアンスの強化など大学への社会的要求も大きく変化してきています。喫緊には、平成30年の学部改組に向けて、教育・研究の情報基盤のアップデートにも遅滞なく対応していくという大きな課題があります。歴代のセンター長も、これら”変化への対応力”を本センターの第一義ととらえ、その実現にご尽力されてきました。具体的に変化への対応力をつけるには、リソースを最大限活用できるような組織的な取り組みが重要であることは言うまでもありません。一方で、その根底には、これら業務に関わるスタッフ個々の知的な好奇心や明確な達成意識を忙しい日常業務の中でも維持できるような運営が重要と考えています。これらを念頭において、”変化への対応力をつける”という歴代のセンター長の御意思を受けついでいけたらと考えています。

実は、本学に赴任する前は企業に長く勤務しており、職場や社内外のプロジェクトマネジメントを担当していました。この時も優秀なメンバーに恵まれ、またマネジメント自体（それほど）嫌いではなく、システムデザインやチームマネジメントに関し、研究・勉強させていただいたり、実践でも大いに鍛えていただきました。しかし、長いこと同じことを担当していると解放されたくになります。とにかく自身の力で何かを実現したくて大学での教員への道を希望した自分にとっては、〇〇長という仕事は、避け

¹情報科学センター長 kushiro@ai.kyutech.ac.jp

巻頭言

て通りたかった道なのかもしれません。こんな自分ですが、本センターおよびセンターを取り巻く多くのステークホルダ（学生、教職員、大学、社会）に対し、何がしかの貢献ができるとしたら、これまで取り組んできた要求獲得（種々のステークホルダの潜在的な要求を獲得するための）方法やこれら要求をシステムとして具現化するための設計プロセスを適用した、いわば「素人発想・玄人実行」を実践することかと思います。（おそらくかなり少数であろう）この巻頭言を読んでいる方、それ以外の（おそらく大多数であろう）ステークホルダからも種々の要求を聞ける開かれた体制と、その多様な要求や変化に柔軟に対応しうる情報基盤を実現できる実力を備えた組織作りを目標にしていきたいと考えています。

今後とも、皆様のさらなるご支援・ご協力（時に叱咤激励）をよろしくお願いいたします。